

平成30年度（第Ⅱ期）教育文化学部国際交流等学術研究交流基金の助成事業

実施報告書

平成31年4月10日

所属・職名：地域文化学科 国際文化講座 准教授
氏 名：辻野 稔哉

○事業概要

地域文化学科としては、今回初めてフランスへの海外研修を行った。参加した学科の学生4名は、いずれも「特定地域研究ゼミ」「外国語発展演習（フランス語）」などにおいて、フランス語やフランス文化について学んできた学生である。また、研修旅行が決定した後は、美術館などの下調べをして発表を行ったり、パリについて書かれた様々な本を読んだり、実際の交通機関の利用法の予習や会計担当などの役割分担を決めるなど、事前準備を重ねた。

現地での研修内容としては、上記「特定地域研究ゼミ」で研究発表を行った藤田嗣治や小牧近江ゆかりの地を訪ねた他、ルーヴル、オルセー、オランジュリーを始めとする様々な美術館を見学した。さらにバルザック、ユゴー、ゾラといった19世紀のパリを描いた作家たちの小説に登場する旧跡なども訪れた。

また、今回はアパルトマンタイプのホテルに滞在し、毎日簡単な会話を実践してパン屋や総菜店、スーパーなどで買い出しを行った。こうしたことにより、研修を単なる史跡めぐりや観光だけに終わらせず、現地の人々の暮らしや習慣にも直接触れるものにしたことができた。

○事業の実施により期待できる効果と意義

これまでの学生生活において勉強してきたことを、現地に行って体感し、自分の目で見て確認することは、何ものにも代え難い貴重な体験である。イメージばかりが先行しがちなパリという街が実際にはどのような所であるか、フランスがどのような社会であるか、自分たちの五感で経験し得たことが何よりも大きな成果だと考える。

また、学生全員が初の海外旅行であった為、外国語（フランス語および英語）でコミュニケーションを行うことの歎びと難しさを同時に体験する機会でもあった。研修参加者は、帰国後もフランス語学習を継続して行く予定であり、今回の経験が実戦的なコミュニケーションの学習の大きなモチベーションとなることが期待される。また、全員がフランス文化系の領域を卒業研究の対象にしているが、この点についても新たな気持ちで取り組みを始めており、研修と勉学との相乗効果が期待できる。さらに参加者たちは、本学内外での体験発表などに今後積極的に取り組む姿勢をみせてくれており、自らの経験を活かして本学部の国際交流活動のさらなる発展に貢献してくれるものと考えている。

○事業期間全般にわたる感想と課題

前述の通り、参加学生全員にとって、今回の研修が初の海外体験であった。しかしながら、あらかじめしっかりとした事前準備・事前学習を行ったため、大きな問題もなく、有意義な研修とすることができた。何事にも敏感で吸収力も旺盛な年齢において、短期間とは言えパリを体験できたことは、今後どのような道に進んでも、学生たちの貴重な財産になると考える。

今後の課題としては、フランスへの研修を定期的なものとし、短期語学研修などにも参加する学生を育成することである。長年に亘る文化の蓄積を感じさせるフランスは、同時に日々変化して行く社会の様相を肌で感じることでできる社会でもある。世界の大きなうねりを意識しつつ、地域の文化や暮らしを考えるグローバルな視点を持った人材を輩出する為に、海外研修のさらなる活性化に尽力したい。なお、今回の研修は、国際交流等学術研究交流基金の支援無くしては成立しないものであった。寄付者の方に対して、心より感謝申し上げる。今後とも多くの学生が、海外において自己の見聞を広め、様々な体験をつむ機会を得ることを強く期待したい。

（以下は参加学生の感想）

1516509 地域文化学科人間文化コース3年 大木美駒

今回の研修は6日間という短期間だったが、我々は研修の約1年前から準備を進めていた。パリの歴史や文化について改めて学び、また実際に訪問する場所の成り立ちなどについても文献から調査をしてきた。この事前調査があったからこそ現地で実感できたことがあり、また、文献からは得られないような情報も現地の経験から得ることができた。例えば、私が研修で訪れた場所のうち、最も印象に残った場所がノートルダム大聖堂だった。建物自体の壮麗さもさることながら、“神秘的な”“神聖な”空間がどういうものかを肌で感じられたような気がして、非常に感動した思い出がある。事前調査で写真や文献をたくさん見てきたが、実際に街の空気や人の匂い、建物の手に触れた感触などは、実際に現地へ訪れないと決して体験できない事であった。また、藤田嗣治の作品展が開かれていた日本文化会館へ訪れた時のこと、開館前から行列ができており、藤田がパリの人々にいかに愛されているのかを目の当たりにした。展覧会へ足を運んで改めて、パリで活動をした画家としての姿を見ることができたように思える。このように、文献から学んだことを現地で実感することができたという点でも研修の成果があったといえる。

その他にも、ルーヴル美術館、オペラ座、エッフェル塔、凱旋門といった観光地として有名な場所へも、時間が許す限り足を運んだ。さらに地下鉄や路線バスを利用した移動、スーパーでの買い物など、パリ市民の生活を肌で体感できた6日間であった。このように6日間の研修で見て、触れて、感じたこと、一つ一つの経験が今までの人生のどの時間よりも濃く、また貴重であった。今回の研修は非常に意義深いもので、今後の人生の大きな財産になるだろう。今回の研修にあたってご支援いただいた国際交流等学術研究交流基金の寄附者の方には深く感謝を申し上げると共に、この経験を今後の研究に反映できるよう努力したい。

1516529 地域文化学科人間文化コース国際文化領域3年 熊谷優希

メディアや観光雑誌でよく目にするパリの街を自分の足で実際に歩くことで、日本で定着して

いる「花の都パリ」というイメージに一致する部分と、必ずしもそうではない意外さを感じる部分を発見できた。石造りで高さが統一された建物が並ぶ街並みは、パリのイメージらしいものであり、木造建築の多い日本では見ることもない新鮮な光景だった。どんなに雑誌の写真などでパリの風景を目にしている、実際に目にとると圧倒され、オペラ座やルーヴル美術館など歴史的建造物の彫刻の精巧さ、細かさに感動した。その一方で、ビルやショッピングセンターなどが建ち並ぶ都会的な地区もあり、そこでは「花の都」というよりも、「フランスの首都」として機能しているパリを見ることができた。

この研修旅行で私達は滞在型ホテルに宿泊したため、スーパーなどで食材を買ってホテルで食事をとった。毎日自分たちで買い物をして食べ物をそろえたことで、フランス人の日常に近い生活を体験できたことは貴重なものだったと思う。

また、本研修ではパリ日本文化会館を訪れ、昨年に東京・京都でも開催された「没後 50 年藤田嗣治展」で藤田の作品を鑑賞した。東京では展示されていなかった作品も複数あり、より多くの藤田の作品を直接目にする事ができた。また、藤田がフランス語でインタビューを受けた映像もあり、実際に藤田がフランスで過ごしていたのだと実感した。

本研修旅行において、フランスと日本の生活の違いや、これまでパリに持っていたイメージとは異なったものを自分自身の目で発見でき、様々な経験と多くの刺激を得た。また、この研修旅行をするにあたって事前授業があったことや、1 年次からフランス語・フランス関連の授業を履修していたことで、学んだことを直接目にした時の感動やそこから学んだことへの理解度はより深いものとなった。

このたび、研修旅行をするにあたって援助して下さった国際交流基金の寄付者の皆様には感謝を申し上げたい。また、この経験をもとにより多くの学生が海外研修に参加し、積極的な国際交流ができるように貢献していきたい。

1516555 地域文化学科人間文化コース3年 鈴木未彩

私はこれまで大学の様々な授業で、フランス語やフランス文化について学んできた。今回のフランス研修は1週間という短い期間ではあったが、これまで得た知識を十分に活用することができる貴重な経験だった。

特定地域研究ゼミでは、秋田とフランスの繋がりとして小牧近江と藤田嗣治について調査し、今回の研修ではこれらの人物のパリゆかりの地を訪ねた。小牧が通ったアンリ四世校やパリ大学法学部を訪れることで、小牧のパリでの生活に触れることができた。また、今回の研修で興味深かったことは、今まで写真でしか見たことのなかった建築物や美術作品を自分の目で見る事ができた点である。実際にフランスの地を訪れたことによって、空間の広さや装飾の細かさなどをリアルに感じられた。様々な場所を訪れた中で、私が最も印象に残っているのはオルセー美術館である。事前学習でオルセー美術館について特に調べていたため、モネやルノワールなど数多くの印象派作品に触れることができたのはとても貴重な体験だった。他にもルーヴル美術館やポンピドゥー・センターなど様々な美術館を訪れることで、時代の変化に伴う作品の傾向の変化や美術館ごとの展示方法の違いなどが感じられた。

また、私は今回が初めての海外滞在だったため不安なことは沢山あったが、中心部に宿泊した

こともあって、短い期間でありながらもパリの町並みに慣れることができた。しかし、フランス語を用いて現地の人と十分な会話をするのができなかったことは少々残念だった。基本的な挨拶以外にも会話ができれば、なお良かったと思う。また、パリの観光地には工事中のものもあり、ガイドブックなどで見るイメージ通りでないものもあったが、等身大のパリを見ることができたのも一つの思い出だと感じた。

今回の研修を通して、言葉が通じにくい環境の中、土地勘もない場所で生活したことは自分にとって非常に貴重な体験であったと思う。日本では言葉が通じるのが当たり前だが、研修の間は言葉の通じない中でいかにコミュニケーションを取るかが重要だった。フランスは挨拶を特に大事にする国であり、買い物の際に注意するなど日本との文化の違いも感じることができ、全体を通して非常に良い経験となったように思う。

また、今回このような研修に行くことができたのは、国際交流等学術研究交流基金からの支援のおかげであり、心より感謝申し上げたい。

1516595 地域文化学科地域社会コース3年 森彩佳

今回の研修旅行を振り返ると、教科書やテキスト、本やガイドブックで見ただけだったフランスを、実際に自分の目で見て肌で感じるということが、自分の中で一番大きな収穫だった。特に、建築物や街の風景が印象強い。例をいくつか挙げると、ノートルダム大聖堂や凱旋門、オペラ・ガルニエを目にしたとき、スケールの大きさに驚いた。ガイドブックなどでは多くの写真がその建築物のみにフォーカスされていたため、そのスケールを想像することができなかった。また、それぞれの建築物に近づいていくと、細部まで彫刻やレリーフが施されていることが分かった。壮大で迫力があり、その一方で繊細で美しいフランスの建築物に感動し、心が動かされたのは、自分の目で見ることができたからこそのことだと考える。

また、私たちは今年特定地域研究ゼミで調査し続けた藤田嗣治の個展「フジタ展」を目的に、パリ日本文化会館を訪問した。特定地域研究ゼミの延長としての活動を、海外で行うことができたのはとても貴重なことだった。

加えて、研修旅行以前は自分のフランス語が通じるかととても不安に思っていたが、簡単なあいさつなど発した言葉が伝わったときは安堵した。しかし、店員が発した言葉はなかなか聞き取ることができず、定型文以外の会話はほとんど全くすることが出来なかった。このようなときには、店員は英語で言い直して対応してくれたため、私もなんとかコミュニケーションをとることができた。フランス語と英語を用いることで、意思疎通はできたものの、フランス語のみで会話ができなかったことは悔しく、研修旅行での数少ない心残りであり、残った課題である。

私はフランス研修旅行のおかげで、海外に行って見たことのないものを見て新しい発見をすることの喜びを得ることができ、何事でも、挑戦することで自分はまだ成長できると思えるようになった。最後に、貴重な経験をすることができた研修旅行への国際交流等学術研究交流基金のご支援に深く感謝を申し上げる。

